

Principal Correspondence

卒業にあたって

第1回卒業生に贈った言葉ですが、第16回卒業生に再度お贈りしたいと思います。
100年近く前の英国のパブリック・スクール卒業に当たっての校長の言葉です。
この100年前の言葉には、そうした英国の毅然たるリーダーを目指す人間としての精神がはっきりと示されています。
当時女性は入学できなかった時代なので男児向けに贈られた言葉ですからそれを含んで読んでいただきたいですし、日本ではおそらくこういう祝辞は無いでしょうが、私は敢えて当校の精神と合致するゆえ卒業生に贈りたいと思います。毎年、これをもってマンスリーリリーベール1年の締めくくりの言葉といたします。

この度、学窓を出る諸君が揃って立派な人間になることは理想であるが、今日の社会ではまだそのような事は到底望めない。志を得るもの、然らざるもの、社会が諸君を遇する道は千差万別であろうが、母校が諸君を遇する道は常に同じく、大臣、大将、僧正、社長、腰、巡查、兵卒、郵便脚夫、いずれの諸君をも、喜び迎える校門の広さに差別は無い。

一つのクラスがそのまま社会の縮図である以上、あるいは諸君の中から刑法を犯した罪人がでるかも知れない。男らしく己の非を認めて潔く規定の服罪を済ませた後は、彼とても母校は喜んで迎えるであろう。ただその然らざるもの、罪を犯して逃れんとするもの、罪を他に転じて一人免れんとするものに対しては、母校の鉄門は永久に開かずの門であることを承知すべし（自由と規律・池田潔著より）。

「自立」「創造」「リーダーシップ」

リリーベールでこれからの人生に役立つ大事なものを、たっぷりと学ばれた卒業生の皆さんは、大きくなったら社会の最先端となって活躍してください。
ご両親や先生をはじめとする多くの人にいただいた「ご恩」や「愛情」は、大きくなったら、今度はみなさんが社会にお返ししてください。

自立して創造性あふれるリーダーたれ！

風よ、光よ、空翔る雲よ、この子らに祝福あれ・・・

ご卒業おめでとうございます。



Principal Correspondence

またお会いしましょう

3月で学童を卒業する皆さん、保護者の皆様、お別れにあたって一言。
人がその人生で成長するために、三つの苦勞をしたほうが良いと昔の人が言いました。
すなわち「愛情の苦勞」「お金の苦勞」「時間の苦勞」です。

そんな苦勞を買ってまでする必要はないのですが、多かれ少なかれ、「親の愛に恵まれなかった」とか「貧乏な家庭で育った」とか「生きるのに忙しくて芸術などに触れられなかった」等々、さまざまなつらい思いや困難を経験することがあるものです。



私の愛する？歌手であり女優のバーバラ・ストライサンド（米国トップスター。代表作「追憶」）は、自身の父親との死別、貧乏などの経験からこう述べています。

「子どもの時につらい思いをした人は、大人になって味わい深い人になれるのよ。」と。例が適当ではないかもしれませんが私にはたまたま全国に経営者やリーダーと呼ばれる知人が大勢います。様々な苦勞をして今の地位を築いた人たちは人情味もあり、尊敬できる人が多いと思います。

大きな会社の御曹司（世に言うサラブレッド）で留学経験もあり、スマートでカッコいいけれど、いざとなると冷たさを感じる人も結構います。人が苦境に陥った時、スーッとなくなるような人です。そういう人には、困った時に手を差し延べてくれる友人は少ないかも知れません。



人生は全てを前向きに考えることです。目の前の課題から逃げずに前向きに頑張れば（頑張りすぎてはいけません）困難は成長のための試練なのです。人生に無駄はないこと。必ずどんな経験からも学べる事を幼少のころから知ってもらいたいと思います。

学童を卒業される皆さん！世界は皆さんを待っています。
先生たちは前向きな人生を祈っています。またお会いいたしましょう。

